

森鷗外「舞姫」の遺恨

須藤直人

(原則として常用漢字・人名用漢字は新字体、印刷標準字体を用いた。引用文中の旧字体は新字体に改めた。)

「舞姫」とは、まず遺恨の告白であった。初出は1890年1月3日発行『国民之友』第6巻第69号で、作者・森鷗外(森林太郎、1862-1922)の四年近いドイツ留学(1884-8年)の経験が反映されている。登場人物であり一人称の語り手である太田豊太郎は五年のドイツ生活を終え、日本に向かう欧州航路の途上寄港したサイゴンで、自分を苦しめている「遺恨」(11)¹⁾を告白する。これを解消しようとしてドイツ生活を回想する文章を船内で書き始める。「人知らぬ恨み」は当初「一抹の雲」の様に太田の脳裏を掠め、次第に「惨痛」を感じさせる位大きくなった。やがて心の中で「一点の翳」になって落ち着いたが、何かに触れる度に「懐旧の情」を呼び起こして苦しみを与えるという(11)。この回想(作品)は最後、次の文で締め括られている。

嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど余が脳裡に一点の彼を憎む心は今日までも残れりけり。(63)

こうして「舞姫」は太田の良友・相沢謙吉に関わる「恨み」「憎む心」を、冒頭部と終結部で繰り返して強調した。

太田が抱いた「恨み」「憎む心」とは、ベルリンで出会い、共に暮らし、太田の子を身籠った舞姫エリス・ワイゲルトとの別れに関するものと見るのが妥当である。踊り子との交際を理由に国家公務員の職を解かれた太田は、相沢の強い勧めもあり、有力者・天方伯爵に語学力を認められ、エリスと別れて天方に従い日本に帰ることを約束した。エリスと天方との間で苦悩する太田が病に倒れ意識不明であった際、相沢は太田との約束をエリスに告知し、そのためエリスは不治の精神病「ブリョートジン」に罹る(63)²⁾。したがって、自分の知らぬ間に相沢がエリスを説得しようとしたこと、その結果、エリスが不治の精神病に罹ったことを、太田は恨み、憎み続けていると考えられる。

この「恨み」そのものは、当時も現在も一般的には理解できる感情であろう。だが責任転嫁は当然非難を招いてしまう。「舞姫」発表の前年1889年1月に坪内逍遙(1859-1935)の「細君」が同じく『国民之友』に掲載された。「細君」ではエリート男性に離縁される妻は、新教育を受けた女性であった。この場合とは異なり、太田とエリスの場合は、出世の望めぬ結婚よりエリートとして功名の道を選んだと当然解釈される。この選択を改悛し、自らを恨むという告白ならばともかく、相沢を憎むとの告白はどういう訳か。

偽悪としての「一点の憎む心」

相沢に責任転嫁した太田の告白を、合理的に解釈することはできるだろうか。その理由は従来太田の性質に求められてきた。確かに太田の性格は、踊り子との恋愛を捨てて大臣の命に従うことがエリートの取るべき道と、断固開き直ることができない。まず「我心」について「かの合歡といふ木の葉に似て、物ふるれば縮みて避けん」とし、「処女に似た」「弱くふびんなる心」と説明する(19, 21)。相沢の説得に心が定まらないまま、「姑く」(とりあえず)承諾した「わが弱き心」(45)を吐露する。さらに天方・エリスとのやり取りを通して、自らの決断力や判断力の弱さを繰り返し認め、恥じ入る。

「いかでか命せに従はざらむ。」余は我耻を表はさん。この答はいち早く決断していひしにあらざ。余は己れが信じて頼む心を生じたる人に、卒然と物を問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範囲を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難きに心づきても、強て当時の心虚なりしを掩ひ隠し、耐忍してこれを実行すること屢々なり。(47)

耻かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、又た我身に係らぬ他人の事につきても、果断ありと自ら心に誇りしが、此果断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照さんとするとき、頼みし胸中の鏡は曇りたり。(51, 53)

さらに天方から帰国の意向を問われると直ちに承諾し、これを「何等の特操なき心」(57)と語る。太田の優柔不断さがエリス破滅の大きな原因であることを太田自身がよく承知して、恥じ入りながらも読者に「悪意なき裏切り」を取って印象付けていると読める。

既に指摘がある通り、作中で太田は「ことさらに貶められ」、エリスは「ことさらに讃美されている」といえる(荒井370)。「舞姫」が「観念的かつ偽善的な人間像を脱した、なま身の弱く脆い人間存在への共感」を描いた点で「画期的な新しさ」を持つ作品であっても(秋山7)、弁解の上に責任転嫁までしてしまっただけでは、却って読者の共感を得られないだろう。同情を受け易く描かれているエリスに、太田は悪意がないことを繰り返し前置きしたうえで恩を仇で返すような仕打ちを演じ、さらに良友・相沢にその責任を転嫁する。最後に念を押すように、わざわざ自らの悪印象を一層悪化させて物語を締め括っている。それは明らかに相沢よりも自らを貶めることになる。太田の「弱き心」は、相沢への「恨み」「憎む心」を殊更に強調する理由としては物足りない。「恨み」「憎む心」は、心の弱さよりは、むしろ偽悪への強い拘りによる表現と考えられるのである。

「舞姫」の物語内容(愛の挫折)は歌舞伎の「色悪物」や人情本の他、18世紀にヨーロッパで流行した「感傷の文学」の流れを汲む。そこで重要なのは登場人物や読者の感情・感傷であり、合理性ではない。太田とエリスとの恋愛の挫折は両者に深い心の傷を残した。読者の批判は、「舞姫」掲載直後1890年2月『国民之友』での気取半之丞(石橋忍月(1865-1926))に始まり、現在まで続いている。主としてエリスへの同情・共感、太田への非難・軽蔑、あるいはそれへの反論——時代状況から太田は踊り子より大臣を選択せざるを得なかった——という形を取る(渡辺203-21)。これは「舞姫」が感傷文学として成功したことを物語っており、特に親友・相沢への責任転嫁は効果的で

あった。

だがそれだけでは「恨み」の強調はやはり不可解と思える。森は「舞姫」を「鷗外森林太郎著」として発表しているので、陸軍軍医・森林太郎を知る読者が登場人物のモデルを想像することが予期されている。ドイツに国費留学した太田は作者・森鷗外と重なる。武島務（1863-90）、原田直次郎（1863-99）といった作者以外のモデルの存在も考えられている。

そうであれば、確かに後悔や自己否定を書けば、モデルと予想される森自身や他の親しい人物達について読者のあらぬ憶測・詮索を招いてしまうだろう（森は1889年西周（1829-97）の媒酌により結婚している）。だが「恨み」の転嫁は道徳的に問題ある態度として一層の批判を受ける。一方、太田の「恨み」を買った相沢もまた、石黒忠恵（1845-1941）、賀古鶴所（1855-1931）、小金井良精（1859-1944）等のモデルの存在がいわれる。いずれも森より年上の親しい人物である。森の家族や賀古は出版前の原稿を読んでいたというのが（小金井41）、森の賀古らへの承服できない感情があったにせよ³⁾、相沢への責任転嫁「憎む心」を念押しする仕方には、やはり疑問が残る。何故太田はエリスを裏切ったことで読者に批判されるところまでで止めて置かなかったのか。何故この遺恨は偽悪的に強調されながら、ただ「一点の翳」「一点の憎む心」であったのか。

以下ではこのような太田の相沢を「憎む心」について、別の視点からの考察を試みる。

相沢謙吉と福沢諭吉

主な登場人物四名の造形について再検討してみる。天方伯爵のモデルと考えられる山県有朋（1838-1922）は「舞姫」発表直前の1889年12月に内閣総理大臣に就任している。石黒忠恵もまたモデルであろうが、陸軍軍医・森林太郎を知らない読者にとっても、当時は特に「天方伯」の名から山県を連想し易い状況であったといえるだろう。作中、天方が相沢を伴って太田が滞在するベルリンを訪れ、太田を通訳としてロシアを視察したエピソードがあり、「明治二十一年の冬は来にけり」（37）とここだけ具体的な年度を挙げて語られている。1888（明治21）年冬には森は既に帰国していたが、内務卿・山県は1888年12月から翌89年10月までヨーロッパ各地を訪れ、これに賀古鶴所が同行している。

だがこれをもって単に「天方＝山県」「相沢＝賀古」として済むわけではない。後の版では削除された、作品冒頭部の天方に言及した箇所には「外交のいとぐち乱れて（略）国事に心を痛めたまふことの一かたならぬ」（9頭注②）とある。当時国家的難題であった条約改正の交渉に腐心する天方大臣と、その目的で天方に雇われ、事の重大さに当惑しながらも、自分への信頼の厚さを遠慮がちに表現する太田が暗示的に描かれている。したがって、天方、太田、相沢とも、作者の経験や身辺世界に基づいた個人的位相の人物であるに留まらない。西洋文明世界に学び、立ち向かった日本の政治家、官僚、学者、留学生の象徴であり、集团的位相の人物でもある。

「エリス・ワイゲルト」についても同様のことがいえる。エリスのモデルで、森の恋人であったといわれるエリーゼ・ヴィーゲルト（Elise Wiegert, 1866-1953）は踊り子とは考え難く、帽子職人で「堅気のお嬢さん」だったという（六草23, 88）。森の帰国直後に来日し、一月余り滞在したが、ドイツ帰国後に森の結婚を賀古から聞いて悲憤した可能性はあっても、発狂したという事実はなく、結婚もしている（六草177, 279）。ベルリンで森と知り合ったのは二十歳過ぎのことで、「十六七」（21）

ではなかった。他のモデルとして、ミュンヘンでの原田直次郎の恋人で原田の子を身籠ったという「マリイ」等が挙げられている。舞姫エリスはそれらの人物像の複合、作者の私的位相の人物というだけでなく、当時日本人男性と親しい関係を結んだヨーロッパ人女性の象徴的な表象でもあろう。さらに踊り子エリスは「当世の奴隷」(31)という集团的位相をも帯びている。

「太田豊太郎」の名を再考してみる。森の親友・原田直次郎の兄・豊吉(1861-94)は同じくドイツに留学(1874-83年)している。地質学・古生物学を専門とし、帰国後エドムント・ナウマン(Edmund Naumann, 1854-1927)の解任を政府に進言したという(小堀189)。その後ナウマンの日本群島論に反論する論文を発表していた。(ドイツ人を父に持つ女性と結婚、1888年1月に子・原田熊雄(1888-1946)が誕生している。)1885年ドイツに帰国したナウマンはドレスデンで講演を行い、これに当地滞在中の森が反論した。さらに翌年ミュンヘンに移った森は、ナウマンの論説「日本列島の地と民」(Land und Volk der japanischen Inselkette)に対して、「日本の実情」(Die Wahrheit über Nipon)で反論するという新聞紙上での論争を展開した。「太田豊太郎」は共にドイツに親しみ、同じドイツ人に反駁した森林太郎と原田豊吉を合わせた名となっている。

「相沢謙吉」の名は、従来モデルと考えられてきた賀古ら前記の人物たちの名とは結び付かない。氏名の形の相似から福沢諭吉(1834-1901)の名を読者に容易に思い付かせる名である。「気取半之丞」の名で作品「舞姫」を批判してきた石橋忍月に対して、森鷗外は「相沢謙吉」の名で反論を行った。このことは作中で太田が相沢への「憎む心」を強調したことと合わせ、やはり相沢は単に親友ということでも、恋人を狂人へ追いやった人物ということでも済まない、特別な存在であると思わせる。ミュンヘンでの原田直次郎との関係とも合わせ、「相沢謙吉=森鷗外」という考え方もできるだろう(新関31)。そのような作中の重要人物・相沢は何故「福沢諭吉」を連想させる名を与えられているのだろうか。

森鷗外が相沢謙吉の名を福沢諭吉に似せたのは、福沢が提唱した実利的な学問観に対しての「シニカルな寓意」であるとする見方が既に示されている(秋山31-2)。この点については後にふれることとし、ここでは森の身辺世界での出来事から名付けの理由を検討してみる。

いわゆる脚気問題を背景として、イギリス留学経験者の海軍軍医・高木兼寛(1849-1920)が発表した原因説に対し、当時東京大学医学部関係者からの反駁が相次いだ(山下40-4)。その一人であった東京大学医学部教授・大沢謙二(1852-1927)の論を、ミュンヘン滞在中であった、東京大学医学部出身の森は1886年10月「日本兵食論」(Über die Kost der niponischen Soldaten)の中で高木説への反論の根拠に使った。

ところが福沢諭吉が1882年に創刊した『時事新報』は、米食を脚気の原因として麦食を主張した高木説を支持していた(1886年7月)。1887年大沢は実験の不備を克服して新たな成果を発表、これをベルリンに移っていた森は早速採り入れ、同年「日本の食物問題」(Zur Nahrungsfrage in Nipon)を書く(小堀157-8)。高名な福沢の『時事新報』が支持した高木説に対して、森は大沢に依拠して非日本食論(洋食論)に反駁し、日本食が西洋食に劣らないことを主張した。この主張を森は帰国から二か月後の演説で繰り返している(山下78-80)。

つまり、高木兼寛の非日本食論を支持する立場の象徴が福沢諭吉、それに反論を試みる森に立論の根拠を与えた研究者の代表が大沢謙二であり、「相沢謙吉」は両者を合わせた名である。太田にとってエリスのことで恨みの対象となった相沢と、窮状を救ってくれた恩人・相沢は、それぞれ森

の栄養食論にとって立場を異にする『時事新報』（福沢）と大沢とに分かれて対応しよう⁴⁾。

したがって、太田豊太郎と相沢謙吉の名には、ドイツ滞在中に格上の相手に論争を挑み、「西洋人」「西洋文明」に対して「日本人」「日本文化」を擁護した森林太郎の経験が刻印されていると見ることができるのではないか。そして「舞姫」が強調した、「遺恨」「一点の翳」となった相沢を「憎む心」とは、高木説支持の『時事新報』に対する反論の隠喩ではないか（勿論そこにエリーゼや「マリイ」の問題、武島免官への思い等が加わると見ることもできよう）。

だがそうだとすると、『時事新報』（福沢）による高木説支持と相沢によるエリスの「精神的殺害」とはどう結び付くのか。太田は相沢がエリスを「精神的に殺し」（61）、「生ける屍」（63）にしたと物語最終部分で畳みかけるように非難する。相沢に対しての偽悪的な責任転嫁の理由については、エリスの「死」を当時の一般読者と共有し得る、集団的位相の問題と関わらせて考察する必要があるのではないか。そのためにまず、次節では「舞姫」が持つ「異国ロマンス」という面に注目する。

「舞姫」と「インクルとヤリコ」

18世紀の欧米、特にイギリスとドイツで流行した「インクルとヤリコ」（Inkle and Yarico）の物語に注目したい。「インクルとヤリコ」の物語は、1657年ロンドンで出版されたりチャード・リゴン（Richard Ligon, 1585?-1662）の英領バルバドス体験記（*A True and Exact History of the Island of Barbadoes*）中の逸話に基づく。この逸話をリチャード・スティー爾（Richard Steele, 1672-1729）が書き換え、日刊紙『スペクテイター』（*The Spectator*）第11号（1711年3月13日）に短編を掲載した。これがきっかけとなり、主に19世紀初めまで韻文・散文の形で様々に書き換えられ、また悲劇、バレエ劇、パントマイム、オペラにもなった（Price 139-40）。このように多様に変奏された物語群には、しかし、おおよそ次の要素が共通して含まれる。——イギリス人のインクルを乗せた船が、カリブ海域で難破する。インクルは先住民の娘ヤリコに救われ、二人は恋愛関係になる。二人はイギリス船に救出され、バルバドスに到着、そこでインクルはヤリコを奴隷にして売り渡す（Hulme 227）。「インクルとヤリコ」流行の背景には「高貴な野蛮人」（Noble Savage）の思想の流行や、奴隷貿易への非難があったとされる（Felsenstein 7, 21, 36, 40）。

イギリス以上に「インクルとヤリコ」への関心が長く持続したのがドイツだった（Price, 138）。ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）もまた「インクルとヤリコ」の物語に強い関心を示している（Price 97-100）。「舞姫」の素材元として指摘されるゲーテの他、ボーデンシュテット（Friedrich Martin von Bodenstedt, 1819-92）、クライスト（Heinrich von Kleist, 1777-1811）、ハックレンデル（Friedrich Wilhelm Hackländer, 1816-77）等々のドイツ文学や、それら以上にエリスのモデルというべき娼婦のヒロインが描かれているという指摘のあるデュマ・フィス（Alexandre Dumas fils, 1824-95）の『椿姫』（*La Dame aux camélias*, 1848）（仁平 58-76）——これらのテキストの前提になったと考えられるのが、ヨーロッパに流布・浸透していた「異種族（賤しい）娘との自由な性愛」の物語「インクルとヤリコ」であった。

「舞姫」で、免官となって生活に窮した太田に住居を与え、太田の子を身籠り、太田の裏切りに遭う、「当世の奴隷」と形容された貧苦の中の舞姫エリスはヤリコと重なる。「優れて美」（27）という点や、踊り子でありながら「賤しき限りなる業」（売春婦）に堕ちない（31）こと、読書を好み、

太田を通してリテラシーを向上させた——太田と「師弟の交り」が生じた(31)ことから、エリスとヤリコとの類似を指摘できるだろう。

リゴンが「事実」として描いた逸話は、その原型は恐らくオーラルヒストリーや口承文芸にある。古代以来類似の物語が語り続けられ、「インクルとヤリコ」として、印刷された文字として書き残された後も形を変え続けた(Felsenstein 2-3)。いずれも実話に基づくとされる、広く知られた、異国・植民地を舞台とする冒険ロマンスとの類似を見出すことは難しくないだろう。ベーン(Aphra Behn, 1640-89)の小説『オルーンコ』(*Oroonoko*, 1688)、デフォー(Daniel Defoe, 1660?-1731)の小説『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*, 1719)や、19世紀以降ロマンス化した北米先住民ポカホントス(Pocahontas, 1595?-1617)とイギリス人スミス(John Smith, 1580-1631)の物語、メルヴィル(Herman Melville, 1819-91)の小説『タイピー』(*Typee*, 1846)、ロティ(Pierre Loti, 1850-1923)の小説『ロティの結婚』(*Le Mariage de Loti*, 1880)等である⁵⁾。これら植民地ロマンスは、「インクルとヤリコ」を含めて、主に日記体・書簡体による実録の形式を取っている。日記体で書かれた「舞姫」は、この系統の中にあるといえる。

難破、もてなしと愛、裏切り

「インクルとヤリコ」の難破(不慮の出会い)、もてなしと愛、裏切りという物語型は、よく知られた、アイネイアス(Aeneas)とデイドー(Dido)の物語の反復である(Hulme 249-59)。この物語は、ウェルギリウス(Publius Vergilius Maro, 70-19 BC)作の叙事詩『アエネーイス』(*Aeneis*, 29-19 BC)の中で描かれた。ドライデン(John Dryden, 1631-1700)の英語訳(1697年)が名高いが、ドイツでも(「舞姫」で言及がある)シラー(Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805)等が翻訳を行っている。デイドーの死の責任は誰にあるのかは常に議論となり、ドライデンのようにユピテル(Iuppiter)に責任転嫁する意見も存在した(杉本正俊 408)。先にふれた19世紀「ポカホントスとスミス」のロマンス化についても、『アエネーイス』がモデルになった可能性が指摘されている(Tilton 49-51)。

「舞姫」にも難破(不慮の出会い)、もてなしと愛、裏切りの物語型が見られる。次は太田とエリスの出会いの場面である。

或る日の夕暮なりしが、余は獸苑を散歩して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユー街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前まで来ぬ。余は彼の灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に蒲団に被ふ巾、襦袢など干したる低き人家、頬髭長き猶太教徒の翁が戸前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は穴居の鍛冶が栖家に通じたる貸家などに向ひて、凹字の形に引籠みて立てる、此三百年前の遺跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫し佇みしことは幾度なるを知らず。

今、この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつゝ、泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。(21) [下線は引用者による]

太田の行動は、未開地・僻地での探検・航海の隠喩を用いて語られている。「舞姫」は、太田が天命を受けて(国費留学生として)訪れた「欧洲新大都」(13)ベルリンの中央に近接する貧民街(「三百

年前の遺跡) を出会いの場に設定した。このような異国趣味的な「場末」の描写により、目的地「モンビシユー街の僑居」への途上で不慮の出会いをした少女が未開・異人種の「先住民」のイメージと結び付く。言説の中の異種族先住民はしばしば、本来征服目的ではなく、他の目的のための航海途中で船が難破した航海者の前に突然現れる。次は『アエネーイス』でのカルタゴ到着の場面で、アイネイアスはウェヌス (Venus) に語っている。

トローヤの名をご存じでしょうか。われわれはいにしえのトローヤの縁の者です。海上をあちこち彷徨いながら、たまたま嵐に遭ってリビウアの岸に流れ着きました。

わたしは神を敬うアエネーアース。家御守護神 (ペナーテース) を敵から守りつつ、この身から離さず、船で運んでいるところです。わたしの名は天上 (エーテル) にも轟いている。イタリアに故国を求め、かの地へ大神ユピテルの末裔を引き連れてゆくのです。

われわれは二〇隻の船をつらねてプリュギウム [トローヤ] の海へ乗り出しました。母なる女神を道案内と恃み、運命に身をゆだねたのです。

しかし、波と南東風 (エウルス) に翻弄され、今ではそのうち七隻が残るのみです。わが身もすっかり落ちぶれ、こうしてリビウアの荒野を彷徨っています。エウローパ [ヨーロッパ] とアジア [アジア] をうろついているのです。(巻1) (ウエルギリウス 15-6) [鍵括弧の注は訳者による]

物語ではアイネイアスとデイドーの出会いはいくまで偶然 (あるいは「運命」の導き) だが、ウエルギリウスの読者はそこにローマとカルタゴの歴史的関係を重ねることができる。エジプトを属領とし (前30年)、オクタウィアヌス (Gaius Octavianus, 63BC-14AD) がアウグストゥス (Augustus) の称号を得 (前27年)、ローマが事実上帝政期に入っていた時期に『アエネーイス』は書かれた。『アエネーイス』と帝国の統一・ローマ化、文化の形成・流布は相関関係にあった。この『アエネーイス』とローマ帝国の関係は、したがって、比較文学者エドワード・サイード (Edward W. Said, 1935-2003) が指摘した19世紀及び20世紀の欧米文学と帝国の関係と符合する (Hardwick 3: Said, *Orientalism: Culture and Imperialism*)。神命に従ってイタリアを目指し、やがてローマ建国の祖となるアイネイアスとカルタゴの女王デイドーの悲恋と後者の死は、ポエニ戦争 (前264-146年)、ローマによるカルタゴ属州化の、支配の現実を隠蔽・美化した隠喩と見える。「布教・文明化の使命」の下で生じたともいえる、植民地ロマンスの中の「特別な女性」「良い先住民」の悲劇についてもまた、同様の解釈が可能である。そして「舞姫」は、日本の「文明国化」や日本国民の啓蒙という使命に文脈を置き換えた。

オデュッセウスにせよ、アイネイアスにせよ、物語の漂流者たちは、「特別な女性」「良い先住民」と出会う前に敵意を表す先住民と遭遇しなければならない。それはジョン・スミスもクルーソーも、また『タイピー』でも基本的に同じであり、「舞姫」もこのパターンを (変形させて) 踏襲している。太田はエリスとの出会いを語る直前に、ベルリンの日本人留学生たちによる嘲笑、嫉妬、猜疑に苦しんでいたと語っている (17, 19, 21)。アイネイアス一行も女王デイドーに初めて謁見した際にこう訴えている。

それにしてもここの人々のやりかたはひどい。かかる野蛮なもてなし方を慣わしとする国が

あるものですか。彼らは砂浜を譲ることが惜しいと見えます。われらに打ってかかって、寸土に足を乗せることも許してはくれぬとは。(巻1)(ウエルギリウス 21)

異国で受ける洗礼(野蛮なもてなし)に対してのカタルシスを与えるのが、アイネイアスにとってはエリサ(Elissa: デイドーの名)の、太田にとってはエリスの役割である。彼女たちの「もてなしと愛」のプロットは長く続かず、それぞれユピテルの伝令使メルクリウス(Mercurius)、天方伯爵の秘書官・相沢謙吉の訪れで急転「裏切り」へと向かう。

彼はきらめく碧玉をちりばめた剣を佩き、肩には、テュルスの紫貝(ムーレクス)の深紅色で燃えるように染め上げられた外套を羽織っていた。これは、富めるデイドーが贈り物として作ったもので、経に繊細な金糸を織り込んであった。

メルクリウスは直ちに叱りつけた。

「きさまは今、カルターゴーの高き宮居の基礎工事などにいそしんでいるが、女の尻に敷かれて、綺麗な都を造り上げているつもりなのか。おい、自分の王国の建設は忘れたのか。

かく言うは、いと高き天(オリュムプス)の君主がきさまに遣わした伝令じゃ。天と地とを御意のまにまに動かすおかた御自ら、わしに天空を駆け抜けて至急このことを伝えよとの思し召しじゃ。(略)

(略)

アエネーアースはこれを見て正気を失い、口が利けなくなった。(略)

ああ、一体どうしよう。恋に燃える女王には、なんと言ったら解ってもらえようか。どう切り出したらよいだろうか。

心はあてどなく、転々と転がり、千々に乱れ、さまざまな考えが、浮かんでは消えていった。(巻4)(ウエルギリウス 104)

(略)彼[相沢]は色を正して諫むるやう、この一段の事は素と生れながらなる心に基したるなれば、今更に言はんも甲斐なし。とはいへ、学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝつらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯も唯だ独逸語を利用せん心ののみなり。(略)人を薦むるは先づ其能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。又た彼少女との関係は、縦令ひ彼に誠ありとて、縦令ひ情交は深くなりしとて、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交りなり。意を決して断てと。是れその言のあらましなりき。

大洋に舵を失ひし舟人が、遥かなる山を望む如きは、相沢が余に示したる前途の方鍼なり。されどこの山は猶ほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果して往きつけばとて、我中心に満足を与へんも定かならず。貧きが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めんよしなかりしが、姑く友の言に従ひてこの情縁を断たんと約しぬ。余は守る所を失はじと思ひて、己れに敵するものには抗抵すれども、友に対して否とはえ対へぬが常なり。(43, 45) [鍵括弧内の注は引用者による]

「舞姫」は以上のように難破、もてなしと愛、裏切りの物語型を、「インクルとヤリコ」延いては「アイネイアスとデイドー」の神話・伝説と共通して受け継いでいる。「舞姫」は「ヨーロッパ男性と非ヨーロッパ女性」の后者が亡びる愛の挫折の物語を、「非ヨーロッパ男性とヨーロッパ女性」に置き換えた逆・植民地ロマンスである。

功労者サルタヒコと太田豊太郎

それでは、エリスは何故森林太郎の恋人エリーゼ・ヴィーゲルトと異なって踊り子なのであろうか。太田豊太郎は、視察のためにヨーロッパを訪れた天方大臣のロシア行の案内という大役を務める。「岩戸隠れ」と「天孫降臨」の両神話に登場する高天原の舞姫アメノウズメは、天孫を高千穂に案内したサルタヒコを送って、男神の地元伊勢の五十鈴川上に落ち着いた。さらに、オオタ（太田）はサルタヒコの子孫の名である。

「天孫降臨」の物語では、その前段で、オオクニヌシが高天原からの使神タケミカヅチに精彩なく屈して国譲りを約束、自身は壮麗な社殿（出雲大社）をあてがわれて退く。オオクニヌシには「根の国」で得た妻、父スサノオに背いて夫を助ける激しい性情のスセリビメがいる。アマテラスの孫ニニギ（天孫）が降されたとき、天の八衢で待ち受けたサルタヒコは天孫を日向の高千穂に案内したという。その際、アマテラスに遣わされた（天の岩戸の前で踊った）女神アメノウズメはサルタヒコを屈服させ、天孫降臨の後サルタヒコに伴って伊勢に落ち着く。その縁故から子孫は「猿女」を名乗り、宮廷神事で神楽の舞等の歌舞を演じて鎮魂の儀を行うことになる。（『古事記』上巻、『日本書紀』巻第一・第二）

またニニギの曾孫ジンム（カムヤマトイワレビコ）の東征（天降り）譚では、高天原から派遣されたヤタガラスの先導で大和に至ったジンムは、土豪ナガスネヒコの強い抵抗に遭う。先に降っていた天津神で、ナガスネヒコの妹トミヤビメを妻とし、ナガスネヒコの主君であったニギハヤヒの裏切りにより、ジンム軍は土着勢力を破ることに成功する。ニギハヤヒは物部氏の祖先神になったといわれる。（『古事記』中巻、『日本書紀』巻第三）

これらの神話と「舞姫」とはおおよそ次の対応関係が見出される。

「オオクニヌシ、サルタヒコ、ニギハヤヒ」＝太田豊太郎

「スセリビメ、アメノウズメ、ナガスネヒコ（トミヤビメ）」＝エリス

「タケミカヅチ、アメノウズメ、ヤタガラス」＝相沢謙吉

「アマテラス、ニニギ、ジンム」＝天方伯

このように繰り返される「降臨神話」では、交渉と裏切り（恭順や帰順）が幾重にも伴い、交渉者と、天孫族のために裏切った者はその功績を後世称えられる。記紀の編者にとって、ナガスネヒコたち土着の抵抗勢力はヤマトの正当な支配者となるジンムの威光に服従しない、亡ぶべき「化外の民」である。

ところが、後世称えられるはずのサルタヒコだけが異なる。作家・坂口安吾（1906-55）は「安吾の新日本地理」（1951年）でオオクニヌシやスサノオの民間での根強い人気と比べて、サルタヒコの不人気に注目した。

(略) 当時の他の親分が、みんな然るべき大神社に祀られているのに、この親分は天孫の道案内まで務めながら、彼を祀った著名な大神社というものはない。(略) 神話中の立居振舞相当なるにも拘らず、後世のモテナシ、まことに哀れである。今回の戦争の結末にてらしても、色仕掛にまるめられて侵略者の道案内をつとめたなどという親分は、いずれの国に拘らず、国民に愛されないのかも知れない。(略) 多情多恨で、失敗を演じているのは神々の通例、大国主などはそれによって人気いや増す有様であるのに、猿田彦はどうもいけない。節操なき者はついに民衆に愛されないのか。大国主は戦い敗れて亡びた首長であった。猿田彦は真ッ先に節を屈し、美姫を得て終身栄えたであろう。しかも民衆の批判は、彼をして貝に指をはさまれ、海中へひきこまれてもがいて死なねばならぬように要求する。しかし彼の実人生は決してそうではなかったであろう。(略) 民衆の批判が常に正当だとは限らない。民衆の批判の陰に泣きくれている魂もある。その魂の言葉を綴るのが文学の役目でもあるのである。(坂口 112-3)

記紀において国津神とされ、「大神」と称えられた程の功労者サルタヒコは、それゆえ却ってその地元である五十鈴川上の民の支持を失ったと坂口はいう。それはともかく、帰順者サルタヒコに向けられたという「民衆の批判」は、エリスを裏切って天方伯(日本国家)に帰順した太田豊太郎にも向けられる。天孫族に下った大国主、猿田彦、饒(=豊)速日を合わせた名の太田豊太郎は、エリスが舞姫であることから、特にサルタヒコを継承していると思われる。

国津神サルタヒコと天津神ウズメの関係は、サルタヒコの不名誉な溺死であっけなく終わる。『日本書紀』にこの溺死の挿話はなく、アメノウズメを祖とする猿女氏の後裔とされる稗田阿礼(生没年不詳)が暗誦したという『古事記』中の挿話である。天孫の案内役として大きな貢献をしながら、かえって無様な死をあてがわれ、半ば「化外の民」の様に扱われた異形のサルタヒコの物語に対して、(サルタヒコの後裔オオタと同名の)太田は語り返した。功労者サルタヒコの無念はデイドー、ヤリコらの無念と呼応して西洋人女性エリスに復讐している。サルタヒコは天津神ニギハヤヒに、ウズメは「化外の民」ナガスネヒコに代えられた。では太田は何故サルタヒコの無念を逆・植民地ロマンスの物語形式で晴らし、相沢への「遺恨」「一点の憎む心」を強調したのか。

逆・植民地ロマンスの野蛮な願望

決して優位には立てない相手と目された「西洋」を「踊り子」(現代の奴隷)に見立て、恋人とし、憐れな境遇から解放してあげると見せて裏切り亡ぼす——この残忍な、いわば「野蛮」な企図・思惑が生じ易い状況の中に、当時の森鷗外はいたといえる。1886年10月横浜から神戸に向かったイギリス船ノルマントン号が熊野灘で難破した。イギリス人船長と船員(イギリス人、ドイツ人)は救命ボートで脱出したが、日本人乗客二十三名(他にインド人・中国人乗組員)は船に残され、全員が水死したとされる。海難審問で船長以下乗組員全員が無過失とされると、国内で非難が高まる。「ノルマントン号事件」は国民にとって大きな関心事となり、「ノルマントン号沈没の歌」が流行した。翌1887年5月には上海沿岸付近で(かつて1884年8月ドイツに向けて横浜を出港した時に森が乗船した)フランス船メンザレー号が遭難する。これを条約改正は時期尚早としたフランス人画家ビゴ(Georges Ferdinand Bigot, 1860-1927)がノルマントン号事件の風刺画として、同年6月横浜居留地で

発行された彼の主宰誌『トバエ』(TÔBAÉ) 9号に掲載している(清水 33-35, 312)。この時期『トバエ』は特に日本の条約改正交渉、ドイツ重視の姿勢や、いわゆる鹿鳴館外交を風刺していた。

鹿鳴館外交が批判され、1887年9月井上馨(1836-1915)は外務大臣を辞任した。1885年鹿鳴館の洋式舞踏会に参加したフランス海軍士官・小説家ロティによる半自伝的ロマンス『お菊さん』(*Madame Chrysanthème*, 1887)が広く読まれた(1893年に歌劇化・単行本化)。長崎滞在時の幼い現地妻との生活を描いた同作品を機に、日本が「異国ロマンス」の舞台の一つとして印象付けられることとなった。その一方で、『お菊さん』に描かれたのはロマンスにふさわしくない鈍感な現地妻であり、それは未だ文明化されない日本というイメージと重なった(Matsuda 164, 165, 180)。

たとえ内閣発足、帝国憲法発布、国会開設が実現しようと、日本文明化に対する西洋列強の解消されない不信がある。この問題は先にふれた森のナウマンとの論争並びに高木兼寛への反論にも関連し、さらに1886年10月ミュンヘンで鑑賞した喜歌劇『ミカド』(*The Mikado; or, The Town of Titipu*; ギルバート(William S. Gilbert, 1836-1911)脚本、サリヴァン(Arthur Sullivan, 1842-1900)作曲、1885年初演)の内容——残忍な処刑を好む日本のミカド——にも関わっている。不平等条約以上に解消困難なのは、西洋文明側からの「他者」への野蛮視であった。日本人男性が西洋人女性と性愛関係を持つこと(逆・植民地ロマンス)には、当然そうした野蛮視に対しての見返しという政治的意味合いが生じた。

森がマルセイユ行の(香港で乗り換えた)フランス船ヤンツ号でサイゴンに寄港した1884年9月、サイゴンはフランス直轄領コーチシナの主都であった。フランスは清仏戦争(1884-5年)を経て、1887年10月コーチシナにカンボジア、アンナン、トンキンを合わせたフランス領インドシナ連邦(主都ハノイ)を成立させる。1888年8月帰路フランス船アヴァ号で再びサイゴンに寄港した際、ホンゲイ炭鉱等トンキンの主要な石炭産地や積出港からサイゴンの港まで、補給される石炭の輸送ルートは全て総督の統轄下に置かれるようになっていた。「文明」の象徴「石炭」は植民地における搾取の象徴でもある。

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと閑かにて、熾熱灯の光の晴れがましきもやくなし。今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残りしは余一人のみなれば。(9)

天方大臣の一行は、船中毎夜、明る過ぎる位の照明の下で骨牌などをして過ごし、寄港時は観光、夜は遊郭に登楼して外泊できる、いわば特権階級の人間である。一方、天方大臣の一行でさえ、外国船では上等室に入ることができない。1885年日本郵船会社が設立されていたが、当時遠洋定期航路は未開設で、欧州航路の利用は外国船に頼らざるを得なかった。中等室の太田豊太郎は、出発まで間があるのに早々と石炭夫が作業を終えたことに気付く。太田らは石炭夫とは異なって文明の恩恵に預かれても、いわば二流の扱いに甘んじなければならない。

「舞姫」はこのように、まず冒頭で、帰国の途にある太田が天方大臣の有能な部下として贅沢な生活を送る「表の世界」と、その生活を支える石炭夫ら労働者の「裏の世界」とをセットにして描写した。逆・植民地ロマンスの語り出しとして、最初の舞台をアジア植民地に設定し、植民地ではないが、西洋列強から同等の扱いをされないアジアの一国日本の立場を間接的に示しておいて、太

田は次に語る主要な舞台ヨーロッパで生じた「人知らぬ恨み」「一点の翳」にふれる。

「舞姫」が保つ均衡

「舞姫」は太田とエリスの恋愛を「恋愛」という新造語（翻訳語）は用いずに、「色」「恋」「愛」「情」という伝来の語で表現した。太田はベルリンで新しい「自由」の気風に傾きながら、それは旧来の「自由」（わがまま勝手）と表裏一体と見なされる環境の中、結局伝統的な「君臣の大義」「忠義」に落ち着く。二葉亭四迷（1864-1909）の『浮雲』（1887-9年）のような文体上の新しい試みは避け、雅文体を用いた。三人称代名詞の「彼」を採用しているが、坪内逍遙が『当世書生気質』（1885-6年）で用いた三人称代名詞「彼女」は用いていない。女性に対しても「彼」を当て、目上の者（天方伯、官長、太田の母など）には「彼」を用いていないことからしても、「舞姫」の三人称「彼（かれ）」は旧来の遠称「彼（か）」の用法に準じている。

こうして表現と内容、文体と文脈の両面で最先端に行き過ぎる欧化を避けながら、貧しい踊り子との恋をめぐる「裏の世界」の物語と、国費留学、欧州視察、条約改正問題といった国家に奉ずる「表の世界」の物語を、バランスを取って織り交ぜ、結び合わせる。この「裏の世界」と「表の世界」を偏らずに総合する態度は、作中でふれられた、「民間学」を官学アカデミズムに対置させ、かつ並置する見方にも通じるだろう。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じにき。そをいかにといふに、凡そ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にて独逸に若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論には頗る高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、曾て大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔にて、読みては又た読み、写しては又た写す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら綜括的となりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には独逸新聞の社説をだに善くはえ読まぬがあるに——（37）

太田は自分が従来通ってきた「一筋の道」（国家のための正統的学問の専門領域）に偏らず、「民間学」を合わせた「綜括的」な知識を得たことに意義を見出している。森がベルリン滞在時に記したとされるノート「想片」（Ideensplitter）には、自然科学の「通俗的な講演」（Populäre Vorträge）に関して、「福沢ノ政学ニ於ケル如ク日本ニテ働カバ其利大ナラン」とある（森95；小堀362, 364）。この覚書の内容は上の「民間学の流布」（啓蒙活動）の重要性を説いた箇所と類似している。福沢諭吉の著作『学問のすすめ』（1872-6年）、『文明論之概略』（1875年）等や『時事新報』（1882年創刊）の民間での大きな影響力と功績が森の念頭にあったことを示すものであろう。森は当時から自然科学と哲学の偏りない認識論的総合を志向していたことが指摘されている（松村89-146）。だがこの「総合」と福沢の説く学問志向とは一致しない面があろう。加えて留学中の1885年3月『時事新報』は第二次世界大戦後「脱亜論」として取り上げられることになる無署名の論説を掲載している。

ここに次のような並行関係が見出せる——福沢諭吉は「半開国」日本の国民に「文明開化」という方針を説得的に示した。福沢は「文明の精神」とは「人民独立の気力」だと説いた。国家も個人も自由・平等・独立のためには、西洋人をも恐れずに命を棄てるべきであり、この「気力」の維持

のため学問が必要だとした（福沢『学問のすゝめ』9, 11, 27, 52）。福沢の『時事新報』は、西洋人の目を考えて独立の覚束ないアジアの隣国を切り捨てるべきとした（福沢「脱亜論」）。だが「文明化」を果たしても、西洋列強に日本人を「文明人」として信用させることは困難であった。

一方、相沢謙吉は「弱き心」の太田に、エリスとの関係を断ち、天方大臣の信用を得て付き従う道を選ぶ指針を示した。相沢に従った太田は天方伯の信用を得たが、留学によって獲得した自由・独立心を失い、エリスとの自由恋愛も失った。「憎しみ」が最後に残った。

嗚呼、独逸に來たりし初めに、自ら我本領を悟りしと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥が暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。曩にこれを操りしは、我某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。(53)

「綜括的」な知識を得て学問の幅を広げた太田は、自分の学問に相応の自信を持っている。だがその学問は、独立心や自由恋愛を守るために天方伯に背き、命を棄てる「気力」を太田に与えなかった。太田にとり、学問はそういうものではない。何かを貫徹する力よりは、偏らない総合的バランスを与えるものである。

そこからすると、福沢が説いた学問と「文明の精神」の関係には受け入れられない点があり、行き過ぎがあった。『時事新報』の「脱亜」もそうである。相沢が与えた指針は太田に必ずしも幸福感を与えなかった。さらに自分が知らないところでエリスに帰国の約束を告げたこと（脱エリスの徹底）は、太田のためとはいえ、太田には行き過ぎであった。

自分の子を宿し「生ける屍」となったエリスを残して去る悲しみを経て、太田はいよいよベルリンを発ち帰国の途に就いた。そのとき「一抹の雲」のように突然生じた「恨み」は、（不平等条約改正問題に苦悩する）天方伯爵グループに加わったことによる不安や緊張に起因するものではないと太田は断っている。天方から受ける「並々ならぬ信用」に対し、太田は「学識、才幹人に勝れたりと思ふ所もなき身の行末いかにと思ひ煩ひて」（9 頭注②）と気概を示さない。「得難い良友」相沢に対しても「一点の憎む心」を隠し持ち、やはり恩に報いる気概を表すことがない。

それらは太田が作品冒頭で「独逸に学びし間に、一種の「ニル、アドミラリー」の氣象をや養成しけん」（9）と語った事柄に相当し、前述した「舞姫」が図る、極端を避けたバランスの表象の一環である。良友であり恩人である相沢をただ一点「憎む心」とは、エリスとの「恋愛」（裏の世界）と、天方伯との「君臣の大義」（表の世界）との両方の線の延長上にある結び目である。「良友を憎む心」は、文明化論（福沢）の大きな功績の認識とともにその罪過——「独立の気力」の偏重——に対するの反駁を含意していたのではないか。これを「舞姫」は強調し、かつその強調の行き過ぎを避けて冒頭部・終結部いずれにおいても「一点の」を繰り返し、バランスを維持した。「舞姫」はこうした均衡維持への志向と、行き過ぎを抑制しようとする志向に貫かれている。ところが、相沢への責任転嫁によって太田が読者に与える悪印象だけが行き過ぎているのである。

「舞姫」は「支配され亡びる憐れな西洋」という実現不可能な、集团的といってもよい願望を、恋人となった西洋人女性が「生ける屍」になるという物語に置き換え、象徴的に実現したテキストと解釈し得る。清貧で若く美しい、太田を一途に愛したエリスが裏切られ、廢人のようになり果て

る。この感傷的な悲劇ロマンスの背後にそうした「野蛮な願望」があるのだとすれば、それはカムフラージュされねばならない。さらに、この「野蛮な願望」は、帰順した功労者サルタヒコの不名誉な死を舞姫エリスの残酷な「精神的死」に置き換えることと連携して達成された。国家的権威のある『古事記』に対する「舞姫」の異議申し立てを目立たせることは避けたいところであろう。高名な「文明論」の福沢が、「野蛮な願望」の想像的実現に物語内で決定的な役割を果たしている皮肉、これもまたカムフラージュする必要があるだろう。

エリスを裏切った太田は批判されるが、両者へのそれぞれ同情と非難のため、読者は悲劇の背後にある「野蛮な願望」には目が行かない。それどころか、恋人を裏切り、悪意がないことの釈明を繰り返した挙句に良友・相沢を憎む心を念押ししたことで、恩人に責任転嫁までする太田に、読者の非難は集中する。幾重にも必要とされた偽装のために、過剰なまでの偽悪は効果的であった。

結 論

帰順したうえ、その忠心が認められないのは二重の無念である。西洋列強から文明国として信頼を得られない日本の姿はサルタヒコと重なった。西洋からはデイドーやヤリコら悲運の非白人女性と重なって見える。エリスの恋愛の挫折はその残酷な復讐、実現不可能な「野蛮な願望」の象徴的達成と考えられる。「舞姫」は『古事記』の「サルタヒコとアメノウズメ」を反転させ、「インクルとヤリコ」延いては「アイネイアスとデイドー」の系譜と接続し、森鷗外のドイツ体験を織り交ぜた「逆・植民地ロマンス」と見なし得る。

太田豊太郎を出し抜いてエリスに引導を渡す相沢謙吉の振る舞いには、(福沢諭吉の)「文明精神」が「野蛮な願望」達成を強く後押しするというアイロニーを読み取ることができる。エリスを裏切った太田の、相沢に抱いた「遺恨」の告白は過剰に偽悪的な責任転嫁と見える。それは読者を太田への非難とエリスへの同情に集中させ、「西洋の死」への願望、功労者サルタヒコの不名誉な扱に関する『古事記』への異議、そして福沢諭吉の「文明化論」に対するアイロニー、これらを包み隠すことができた。福沢は西洋からの独立維持のため命を賭すことを奨励した。だが死は国家に尽くした功労者ではなく西洋にこそ割り当てるべきである——「遺恨」がこうした不服と願望を見えなくした結果、日本に回帰する太田が批判される。「舞姫」はナショナリズムの昂揚期にあって、時局に過剰適応した日本回帰肯定の物語として流通するのを避けることができた。「舞姫」は欧化と回帰、欧文脈と和文脈の均衡を保つ作品となった。

注

- 1) 「舞姫」からの引用は杉本完治編著『森鷗外『舞姫』：本文と索引』（新典社、2015年）の「本文篇」にある、『国民之友』掲載本文による作品本文（同書8-63頁の奇数頁に掲載）から行った。ただし、1915年12月23日発行『塵泥』掲載本文（作品本文は同書8-63頁の偶数頁に掲載）を参考に、適宜句読点・濁点の付加変更を行った。引用頁を本文中の括弧内に記す。
- 2) 『塵泥』版では「パラノイア」に書き換えられた。
- 3) 作品が森鷗外の心理的負荷を軽減しようとする「防衛機制」（置き換え）の役割を果たしたとする説明もある（武智315-6）。
- 4) ただし、大沢とは帰国後の1889年兵食論をめぐる論争となる（小堀139）。
- 5) ポカホンタスに関する言説のロマンス化については（Tilton 34-57）を参照。『ロティの結婚』は最初『ララフ』

(*Rarahu*) という題で 1880 年出版された。

引用文献

(日本語)

- 秋山公男『近代文学 弱性の形象』翰林書房、1999 年
 荒井弘「『舞姫』エリスの夢と幻滅」(1984 年) 長谷川 343-73 頁
 ウェルギリウス『アエネーイス』杉本正俊訳、新評論、2013 年
 小金井喜美子「森於菟に」(1936 年) 長谷川 38-42 頁
 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会、1969 年
 坂口安吾「安吾の新日本地理」『坂口安吾全集 11』筑摩書房、1998 年、106-334 頁
 清水勲編『ビゴー『トバエ』全素描集：諷刺画のなかの明治日本』岩波書店、2017 年
 杉本完治編著『森鷗外『舞姫』：本文と索引』新典社、2015 年
 杉本正俊「解題」ウェルギリウス 391-420 頁
 清田文武編『森鷗外『舞姫』を読む』勉誠出版、2013 年
 武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』思文閣出版、2014 年
 新関公子『森鷗外と原田直次郎：ミュンヘンに芽生えた友情の行方』東京芸術大学出版会、2008 年
 仁平道明「『舞姫』と戯曲『椿姫』独訳 *Die Cameliendame*」清田 58-76 頁
 長谷川泉編『森鷗外『舞姫』作品論集』クレス出版、2000 年
 福沢諭吉『福沢諭吉著作集・第 3 巻 学問のすゝめ』慶応義塾大学出版会、2002 年
 ———『脱亜論』『福沢諭吉著作集・第 8 巻 時事小言 通俗外交論』慶応義塾大学出版会、2003 年、261-5 頁
 松村友視『近代文学の認識風景』インスクリプト、2017 年
 森鷗外「Ideensplitter」『鷗外全集・第 38 巻』岩波書店、1975 年、94-5 頁
 山下政三『鷗外森林太郎と脚気紛争』日本評論社、2008 年
 六草いちか『それからのエリス：いま明らかになる鷗外「舞姫」の面影』講談社、2013 年
 渡辺善雄「『舞姫』の悲劇」清田 203-21 頁

(英語)

- Felsenstein, Frank, ed. *English Trader, Indian Maid: Representing Gender, Race, and Slavery in the New World: An Inkle and Yarico Reader*. The Johns Hopkins University Press, 1999.
 Hardwick, Lorna. Introduction. *Classics in Post-Colonial Worlds*. Ed. Lorna Hardwick and Carol Gillespie. Oxford University Press, 2007. 1-11.
 Hulme, Peter. *Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean, 1492-1797* (1986). Routledge, 1992. ピーター・ヒューム『征服の修辞学：ヨーロッパとカリブ海先住民、1492-1797 年』岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳、法政大学出版局、1995 年
 Matsuda, Matt K. *Empire of Love: Histories of France and the Pacific*. Oxford University Press, 2005.
 Price, Lawrence Marsden. *Inkle and Yarico Album*. University of California Press, 1937.
 Said, Edward W. *Orientalism*. Pantheon Books, 1978. エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳、板垣雄三・杉田英明監修、平凡社、1986 年
 ——. *Culture and Imperialism*. Chatto & Windus, 1993. エドワード・W・サイード『文化と帝国主義』全 2 巻、大橋洋一訳、みすず書房、1998-2001 年
 Tilton, Robert S. *Pocahontas: The Evolution of an American Narrative*. Cambridge University Press, 1994.

(本学文学部教授)